

講演「防災力の向上について」（概要メモ）

講師：栗田 暢之 NPO法人レスキューストックヤード代表理事

「防災力の向上について～災害救護NPO活動を通して」と題して講演が行われました。

講演内容は、1. 30年前の原体験、2. 今後も増える災害と「防災」の課題、3. 活動災害現場からの学び、4. NPOの試行錯誤となっています。以下に、その概要を紹介します。

1. 30年前の原体験

1976年9月に長良川が決壊し、「安八水害」が発生したときの体験が紹介されました。岐阜県出身で当時小学6年生だったこと、その時、家族が一丸となって隣近所と一致団結して、辛い避難生活を乗り越えたこと、少し高台にあった家に、近隣の5世帯が避難し、総勢25人で2週間の共同生活をして支え合ったこと、やっと水がひいた頃は、もはや地域は家族同然のようになっていたこと、等が述べられました。災害時には家族力・地域力がものすごく大事だと実感したことが紹介されました。

他方、あれから30年、長年地縁・血縁で災害を乗り越えてきた日本人の営みは、少子高齢化や地域の希薄化で、確実に防災対応力が低下している。そのような時代に私たちは生きているとの指摘がなされました。

2. 今後も増える災害と「防災」の課題

災害対応力が低下しているのに、地震・水害は増え、東海・東南海・南海地震への警戒が益々高まっていること、直下型地震の恐れもあり、異常気象も増えると予測されていることが指摘されました。また、阪神淡路大震災で亡くなった方の8割が家屋の損壊によることを考えれば、耐震対策はやらなければならないことは分かっていますが、例えば、行政が無料で行っている耐震診断の利用者は少ないとの指摘がありました。さらに、自主防災組織に参加したとしても、現状の防災のための諸活動は災害後の「応急対応」が中心になっていて、災害が起こった後の命があったことを前提とする訓練や組織図では、実際の災害時にはあまり役立たないことが述べられました。これからは災害前の被害軽減のために、「耐震班」「家具止め班」「ブロック塀調査班」など、今必要な防災行動につながる組織づくりをする必要があるとの指摘がありました。

「自分の命は自分で守ろう」というスローガンだけでなく、「自分の隣近所は自分達で守る」ことをいつもセットで考えないと、地域全体の被害軽減につながらないとの指摘がありました。

3. 災害現場からの学び

今まで25箇所ほどの災害現場に接した経験から、一般的な訓練内容と災害現場の違いに着目しなければいけない点が3つあることが述べられました。①町会行事の時のように指揮をする人がいない時に起こるのが災害現場であること、②火災現場には

訓練会場に並んでいるような消火器は置いてないこと、③昼間の地震が来た時に家の中に残される人達、(お年寄り、女性、子供)だけで火を消す訓練をやっていないことが指摘されました。

新潟県中越地震では被災した方々の人間力や地域力が発揮されたこと、他方、小学1年の女の子が左手3本の指を切断するといった事例が紹介され、被災者からの生の声を聞くことで、私たち自身の地元での減災につなげることの重要性が述べられました。

被災地から学び、減災のための具体的な行動・対策につなげていかなければ、また同じようなことを繰り返してしまうこと述べられ、災害現場から学ぶことは、災害後の訓練をするよりも、「命を落とさない・大けがをしない」そのための基本的な対策が最も先決だとの指摘がなされました。

4. NPOの試行錯誤

NPO法人ストックヤードの活動紹介がなされ、災害現場からの学びを減災行動に結び付けていくためのさまざまなプログラムを実施していること、そのポイントは、これまではどちらかと言うと他人(行政)任せになっていた防災を、自分達の課題だと気付いてもらうこと、ワークショップなどを取り入れた住民参加型にすること、行政への陳情大会にしないこと、地域住民のパワーを引き出すこと、などが述べられました。

防災意識は高まっても防災行動にはなかなか至らず、防災活動を継続的に実践していくことの困難性、防災とは、きめの細かさや粘り強さによって徐々に浸透していくものだと感じており、この意味で、NPOの役割は益々重要になり、そのために微力を尽くしたいと述べられました。